人と人、人と地域のきずなを結ぶ情報誌

京葉銀行

きずな

KIZUNA

2015
春·夏号
No.10

特集

幻の技能を、ゆるぎなく伝える。

佐倉市

千葉 物語の散歩道

荷風が暮らした時代を思いながら「断腸亭日乗」の街を歩く。

HOUSING　住宅

毎日繰り返し使うから、安心して調理できるキッチンに。

作業がスムーズにはかどり、楽しくなる理想の空間にする。

2015 ● 春・夏号　No.10

contents

旧増田家住宅　明治初頭（約130年前）に建築された茅葺屋根（かやぶきやね）の農家住宅。平成2年から約2年をかけて千葉市から佐倉市「市民の森」へ移築された。ひな壇を飾るなど季節の行事も再現され、敷地内では江戸時代の農具や工具の展示も行っている。

04　きずな特集
幻の技能を、ゆるぎなく伝える。
佐倉市

08　町の繁栄を願って生まれた
佐倉の銘菓「蔵六餅」

10　千葉 物語の散歩道
荷風が暮らした時代を思いながら
「断腸亭日乗」の街を歩く。

14　HOUSING　住宅
毎日繰り返し使うから、安心して調理できるキッチンに。
作業がスムーズにはかどり、楽しくなる理想の空間にする。

16　いきいきヘルシーアップ
心も体も軽やかに動かして
元気になる「ポールウォーキング」

18　健康度チェック&チェック
第10回 血管が弱くなると命にかかわる状態に！脳梗塞・心筋梗塞チェック

20　暮らしのマネー情報
投信積立

22　エコスマートなまちに学ぼう
私たちの明日が見つかる「千葉のエコ」（松戸市）

23　育てる 味わう 楽しむ　ベジタブルライフ
第2回「ミニトマト」

表紙写真:佐倉ふるさと広場
佐倉とオランダとの関係は、遠く江戸時代に遡る。当時、佐倉藩の蘭医学は全国に知られ、各地から医学生が訪れた。そして、この歴史的な交流から佐倉日蘭協会が設立され、文化交流が続いている。『佐倉ふるさと広場』は、この流れを受けて、国際親善の場となるよう設けられた。広場では平成元年より毎年4月にチューリップまつりが開催され、佐倉市制40周年の平成6年には本格的オランダ風車が建設された。この風車はメカニズム部分をオランダで製造し、オランダ人技師により建設されたものだ。

好きだからここにいる。千葉がふるさと

— 佐倉市 —

きずな特集

幻の技能を、ゆるぎなく伝える。

佐倉竹芸保存会

旧増田家住宅前にて

千葉県は温暖な気候により、古くから良質な竹の産地として知られ、竹を使ってさまざまな道具類が盛んに作られてきた。とりわけ房州うちわは、四国の丸亀うちわ、京都の京うちわと共に全国三大うちわのひとつに数えられ、昭和初期頃までは隆盛を誇った。竹細工は佐倉でも盛んで、中でも日用品づくりを仕事としていた一人が14年前に他界された中台一司さんだ。その製品は品質の高さゆえに、アメリカにも輸出されていた。時代が移り、プラスチックやビニールなどの普及で、竹製品づくりは急速に衰退した。やむなく中台さんは工芸品の製作へと転じ、茶器や花器などで高い技量を発揮。日展や日本伝統工芸展などの著名な展覧会に次々と作品を発表し、竹細工を芸術の域にまで高めた。その後、伝統の技が途絶することを懸念し、昭和57年に「佐倉竹芸保存会」を立ち上げた。伝説の職人亡き後も、現在23名の会員が懸命に伝統技術の保存と継承にいそしんでいる。

ゼロからものをつくる喜びは、
何度味わっても忘れられない。

竹を使った材料作りから徹底的に技術を習得する

佐倉市のレジャー施設「佐倉草ぶえの丘」に隣接して、移築保存されている古民家、「旧増田家住宅」。そこに毎週火曜日、保存会の会員が集まり、竹を使った作品作りに励んでいる。竹を切る人。割る人。裂いてひご(薄く細く削った竹)を作る人。作品を編む人。それぞれが自分の作業に余念がない。その間を回りながら指導やアドバイスをしているのが小平彦重さんだ。鋭い眼光とすっと伸びた背筋は、93歳という年齢を感じさせない。船舶作りから植木職人を経て竹細工に興味を持ち、中台さんに師事した一人。当時、取得が困難だった県知事認定の竹工芸二級技能士(※)の保持者でもある。

作品作りはひごを作る作業から始まる。幅2・5ミリ、厚さ0・4ミリといったひご数百本を準備するのは非常に根気の要る作業だ。幅や厚みが同じでないと編み目が揃わなくて形も美しく仕上がらない。基本的な編み方は6通りだが、その応用を入れると数千通りにもなるという。保存会の目的は中台さんの技を伝承することである。技術習得のため、初級、中級、上級、最上級の4段階で技術をマスターしていく。最初は徹底的に基礎技術の習得に励み、最上級をクリアすると独自のデザインに挑戦できる。指導者・小平さんの作品を見せてもらった。染色の異なる3種類のひごで編んだ模様が、立体的に見え、非常にモダンな作品に仕上がっている。「こんな作品を作りたいと、自分が頭に思い浮かべたものを実際に形にできることが竹工芸の魅力です」と小平さんは語ってくれた。

異業種の人々が集って楽しみながら作品を形に

会長の米中(こめなか)英夫さんは、中台さんの直弟子の一人で、毎年、大田原市で開催されるアマチュア全国竹芸展(現在はプロも出品)の第1回で最優秀賞を受賞した。折り紙つきの腕を持つ竹工芸作家として、伝統工芸の研究会員や千葉県美術会会員にも名を連ねている。「一つの作品の完成までに半年。完成したときの感動は毎回忘れられません」という。作品づくりへのこだわりゆえに、米中さんは加工用の道具までも自作してしまう。

会員のプロフィールも多彩だ。会長の米中さんは、かつては航空機の整備士。第15回全国竹芸展で同じく最優秀賞を受賞した副会長の小野塚昇さんは元機械設計技師。異業種の人の集まりが新鮮だと語ってくれた。矢吹正勝さんは元警視庁の機動隊員。保存会が開催した「竹の花かご作り」のイベントに参加して作る楽しさを知った。「皆で雑談しながら知らず知らずのうちに完成するのが楽しい」という。

昨年、佐倉市の美術展で奨励賞を受賞した武関玉城さんは元高校の技術教師で、会員の竹細工に必要な道具作りも引き受けて、役に立つことがやりがいだと語る。

幹事を務める菅(すが)勇二さんは元システム開発会社の経営者で、今は佐倉市シルバー・パソコン班の班長。菅さんがオランダの設計図を元に製作した佐倉のオランダ風車の20分の1の模型は、現在、佐倉市に寄贈され、市民音楽ホールのロビーで回っている。

夫婦で同じ趣味がもちたいと、1年ほど前に入会したのが今給黎(いまきいれ)民司さん・浩子さん夫妻。「竹は癖があるのでなかなか思い通りいかない」とこぼす民司さんに、「そこが面白いんじゃないの」と浩子さんが返す。会員23名中、女性は7名。その中で長峯俊子さんも中台さんの門下生の一人だ。籐細工(とうざいく)教室の先生でもあるが、材料作りから始まる竹細工の幅の広さが魅力だという。「新しい人にどんどん入っていただいて、作品づくりを楽しんでほしいと思います。それが竹工芸の保存につながれば言うことはないですね」。技能を伝えるのに不可欠なのは、「作る喜び」と「集う楽しさ」かもしれない。

佐倉竹芸保存会のHP　http://www.sakura-chikugei.com/

(※)この資格は現在廃止となっています。

町の繁栄を願って生まれた佐倉の銘菓「蔵六餅」

地元銘菓のルーツは実は意外なあの有名店

蔵六とは亀の異称。手足、頭、尻尾の6つを、固い甲羅の中に「蔵す（かくす）」ことからそう呼ばれる。佐倉の藩主だった堀田家には、古くから地肌が亀の甲のように見える奇石「蔵六石」が家宝として伝えられていた。「蔵六餅」はこの石にちなんで作られた最中だ。蔵六餅が誕生したのは、6町村合併で佐倉市となった昭和29年のこと。6つの自治体が力を合わせて、千年万年も先まで栄えるようにとの願いを込めて、店主が発案した。60年以上が経った現在も、蔵六餅は人々に愛され続け、贈答用にも重宝されている。まさに蔵六の面目躍如たるところだろう。

この銘菓をつくる店の名前を「蔵六餅本舗」と思い込む地元の人も多いようだが、本来の屋号は「木村屋」。あんパンで有名な「銀座　木村屋」ののれん分け2号店として始まったことは、あまり知られていない。明治15年、佐倉の歩兵第57連隊に非常食やパンを納入する御用商人として創業。学校給食などにも事業を広げたが、戦後和菓子店に転換したという。

蘭学が盛んだった歴史と文化の町、佐倉。豊かな自然と落ち着いた町並み、佐倉城址公園、旧堀田邸、3つの美術館など観光資源にも恵まれる。10月の第2金・土・日曜日に開催される「佐倉の秋祭り」では、各町内から山車人形や神輿が出る。「佐倉の江戸勝り」という言葉が残るほど、祭りはいまも盛大だ。地元では町のピーアールとして、アートクラフト展※などをはじめとする、さまざまなイベントや催しも開催する。店主の鵜沢弓子さんはこうした祭りや各種イベントに参加して、町おこしにも積極的に取り組む。「歴史と文化の町を保存したい。それには私たちのような古いのれんの店を続けていかなくては」と鵜沢さんはいう。町のために何とかしたい。そんな思いを抱きながら、今日も店を開け続けている。

中庭には江戸時代（1800年頃）に建てられた蔵が、日清・日露・太平洋戦争と厳しい時代を経て現存。安政5（1858）年の箱書きがある杯や皿、古九谷の盃をはじめ、町の歴史を物語る品々を目にすることができる。

佐倉市の「蔵六餅」 笑顔になれる味を丹念に

もともとさまざまな種類があった蔵六餅は、現在はこしあん、つぶあん、白あんの3種類。あんには北海道産の小豆が使用されている。白あんに使われるのは、ベビーライマ種という白い豆。あんに合わせる砂糖、水飴、寒天などの割合や工程は企業秘密。砂糖の分量が比較的多めなのは、あんから水分を逃さないようにして、最中の皮がべとつくのを防ぐため。求肥は白玉粉に砂糖を加え、蒸気で蒸しあげる。最中の皮にあんを詰め、求肥を入れてふたをする。「ひと口食べたお客さまが、美味しくて思わず笑顔になるようにと願って作る」という蔵六餅は、繁忙期には1日6000個ほどをこしらえることもあるという。

蔵六餅本舗　木村屋
〒285-0023　千葉県佐倉市新町222-1
営業時間　9:00～18:00
定休日　季節により水曜日定休の場合あり

※「にわのわアート&クラフトフェア・チバ」は5月30日、31日に佐倉城址公園で開催予定。
ホームページ http://niwanowa.info/

市川市

荷風が暮らした時代を思いながら「断腸亭日乗」の街を歩く。

明治から太平洋戦争後にかけて一世を風靡した作家・永井荷風。東京大空襲で麻布の自宅・偏奇館が焼失して各地を転々とした後に、昭和21年から移り住んでその晩年を過ごしたのが市川市です。大正6年に書き始められ、亡くなる直前までの暮らしぶりが綴られている作家の日記「断腸亭日乗」でその足跡をたどってみましょう。

真間川の桜

桜の時期には、真間小学校周辺に桜の花が咲き、真間川を背景にして撮影した荷風の写真も残されています。

大門通り

大門通りは現在「万葉の道」と名づけられ、地元・市川の書家による万葉の歌のパネルが所々に飾られています。

闇市に寄り真間川の桜を眺める

東京小石川でエリート官僚の長男として生まれた荷風は、20代半ばにはアメリカ、フランスで銀行員として勤務。その体験を描いた『あめりか物語』を皮切りに作家として名を上げ、大正時代の花柳界を題材とした『腕くらべ』や、玉の井という歓楽街を舞台にした『墨東綺譚』など、数々の名作を残しました。市川では当初、2人の知人宅に寄寓していましたが、いずれとも折り合いが悪く、ついには市川菅野に自宅を購入して独り住まいを始めます。『断腸亭日乗』には、足しげく銀座や浅草に通いつめ、劇場やカフェに入り浸るかたわら、市川の街を方々歩き回った足

亀井院・真間の井

江戸時代に弘法寺貫主の隠居寺として建てられた寺で、一時期、詩人の北原白秋が住んでいたことも。左の渡り廊下の下をくぐると、手児奈が水を汲んでいたとされる井戸が残されています。

●市川市真間4-4-9　●047-372-1561

手児奈霊神堂

多くの男性たちが自分のために争うのを見かねて、入水自殺を遂げたという伝説の美女・手児奈を祀ったお堂。建物の脇にはその昔、入江だった名残である池が残されています。

●市川市真間4-5-21　●047-371-2953

跡が記されています。

まずはJR市川駅周辺を歩いてみましょう。当時、駅前には荷風が『マーケット』と記した闇市があり、荷風はここで精進揚げを買い、鰻飯を食べたりしていました。背広に下駄履きで、買物かごをぶら下げて歩く姿が見られたそうです。国道14号のコンビニの角を曲がって続く大門通りは、真間山弘法寺へと向かう道。市川真間と呼ばれるこのあたりは、万葉集にも登場する『真間の手児奈』の伝説が残されています。伝説の美女を祀る『手児奈霊神堂』は、荷風の小説にも登場します。すぐそばの亀井院という小さな寺の奥に、手児奈が水を汲んだといわれている井戸も現存しています。

春には真間川周辺やその近くにある真間山弘法寺の桜が見ごろ。昭和22年4月16日の日記では、「晴。正午小滝氏来話。共に出でて真間川の桜花を看

話飲茶屋　つぎはし

元ブリキ玩具工場だったというこの店。ゆったりしたソファ席やテラス席もあり、挽きたてのコーヒーやケーキセットが楽しめます。
●営業時間　9:00〜16:00　●定休日　年中無休
●市川市真間4-7-23　●047-372-5892

真間山弘法寺（まままさんぐほうじ）

奈良時代に行基がこの地に立ち寄り、手児奈の悲話を耳にして、その霊を慰めるために建てたもの。当初は「求法寺」と書きましたが、その後、空海が立ち寄った際に建て替えられ、名前も真間山弘法寺と改められました。
●市川市真間4-9-1　●047-371-2242

伏姫桜（ふせひめざくら）

※掲載の情報は2015年3月のものです。

る。花季早くも過ぎ落花紛々として雪の如し」と記しました。弘法寺の60段ほどの石段を昇ると、境内には『伏姫桜』と名づけられた樹齢400年を超える枝垂桜の巨木があり、いまも艶やかな花を咲かせています。古くは入江だったこの辺りには、万葉集にも歌われた「つぎはし」がありました。そのたもとにあるカフェで、疲れた足を休めましょう。

法華経寺の御会式を訪れ戦後の混沌とした世相を見る

荷風は中山の法華経寺も訪れています。下総中山駅から伸びる『中山参道』を北へ向かい京成電鉄の踏切を渡ると現れるのが、黒門と呼ばれる法華経寺の総門です。さまざまな店が立ち並ぶ参道の右手にあるのが、江戸時代から残る庭園が見られる清華園。さらに奥へ進むと赤門と呼ばれる山門があります。法華経寺は、1260年に日蓮によって開かれた寺。昭和22年11月に、2日続けて御会式を見に来た荷風は、軽業や手踊り、火消し、物売る露店の娘等が織りなす境内の賑わいに、戦後の混沌とした世相を感じ取っています。店構えにいまも当時の面影を残す『額堂』という茶店では、中山名物のきぬかつぎが味わえます。

中山には多くの文化人が住んでいました。その一人が東山魁夷（ひがしやまかいい）。法華経寺から続く曲がりくねった道の先にあるのが『市川市東山魁夷記念館』。戦後50年間にわたりこの市川市で暮らした日本画家・東山魁夷の作品や画材などが展示されています。

亡くなる前日まで通いつめた料理店にはいまもファンが

荷風が最晩年を過ごした本八幡は、平安時代に創建された『葛飾八幡宮』にちなんでその地名がつけられました。『断腸亭日乗』には八幡宮や、水戸光圀が迷い込んだという逸話がある『八幡の藪知らず』が登場します。京成八幡駅西側の踏切から伸びる

祖師堂

日蓮大聖人像が安置される祖師堂は、比翼入母屋造り（ひよくいりもやづくり）という建築様式が特徴で、平成9年に復元されました。

中山法華経寺

11月には全国から僧侶が集まる大荒行が100日間にわたって行われます。本院の奥には日蓮を法難から救ったとされる鬼子母神のお堂が。日蓮直筆の立正安国論が保存される聖教殿。法華堂や祖師堂などの建物は、重要文化財に指定。

●市川市中山2-10-1　●047-334-3433

赤門

山門である赤門の額には、日蓮宗の熱心な信徒だった、江戸時代の書家で陶芸家である本阿弥光悦の筆になる額がかかっています。

清華園

清華園内の建物は「街歩き案内所」として中山界隈の情報提供も行っています。

●休館日　月～木曜日（金・土・日曜日に開館）
●開館時間　10:00～16:00
●市川市中山4-14-1
●047-333-6147

市川市東山魁夷記念館

世界的にも有名な日本画家・東山魁夷は戦後ずっと市川に住んでいました。館内には東山魁夷の作品のほか、愛用品、書籍などを展示。また、ショップやカフェレストランも併設されています。

●開館時間
10:00～17:00（入館は16:30まで）
●定休日　月曜日（祝休日に当たる場合は、翌平日）、展示替期間、年末年始
●市川市中山1-16-2
●047-333-2011

御休み処　額堂

慶応年間に創業したという店は昭和13年に建てられた昔ながらの造りで、店内では中山名物のきぬかつぎやこんにゃく田楽のほか、食事も楽しめます。

●営業時間　11:00～17:30
●定休日　不定休（2月後半や夏季には長期休みの場合があります）
●市川市中山2-4-13
●047-335-2385

葛飾八幡宮

平安時代、宇多天皇によって下総国総鎮守としてつくられた神社。樹齢1200年といわれる千本公孫樹（せんぼんいちょう）は国の指定天然記念物。毎年9月15日の例大祭から20日まで「農具市」（ぼろ市）が開催されます。

●市川市八幡4-2-1　●047-332-4488

八幡の薮知らず

国道に面して鬱蒼とした竹やぶで小さな社が祭られています。断腸亭日乗では「八幡知らずの藪」とあり、当時その門前は賑わいを見せていたようです。

●市川市八幡2-8　●047-332-4488

商美会商店街は、『荷風の散歩道』と名づけられ、荷風が利用した文具店が残っています。商店街を進んで左に入った場所にある『白幡天神社』では、市川に移り住んだ当初、夜中に家主のラジオの騒音から逃れて時間つぶしをしていました。

荷風が亡くなる前日までの数年間、頻繁に通っていた料理店が『大黒家』。来店すると判で押したようにカツ丼とお新香、そして日本酒を注文していたそうです。

大黒家

荷風は日乗の中では「大黒屋」と記していました。各種料理やうなぎ、てんぷらのほか、ランチタイムにはセットメニューも充実しています。荷風セットは1500円。

●営業時間　月～金曜日11:00～14:00、16:30～22:00、土・日曜日、祝日11:00～21:00
●定休日　第1木曜日
●市川市八幡3-26-5
●047-322-1717

「店のいちばん奥が定席で、先客がいると帰ってしまわれるので、来店されそうな昼過ぎの頃合には、席を取りおいておきました。定休日に来店し、私がカツ丼をこしらえたこともありましたね」と懐かしそうに話してくれたのは女将の増山孝子さん。取材した日の昼過ぎにも、若い女性が荷風セットを注文。今も続く荷風の人気ぶりを物語っているようでした。生前から「市川が好き、市川を墳墓の地と決めた」と口にしていた荷風。その名残りは街の至るところにありました。

白幡天神社

1180年に源頼朝がこの地で御印の白旗を掲げたことが社名の由来。拝殿には勝海舟が書いたとされる額がかけられています。

●市川市菅野1-15-2
●047-322-1798